

学 位 論 文 題 名

中世仏教と鎌倉幕府

学位論文内容の要旨

論文の構成

緒言

第一部 中世仏教の基本構造

第一章 中世仏教と神祇

第二章 中世仏教の三つの思想空間

第三章 中世仏教の構造的展開

第二部 鎌倉幕府と中世仏教

第一章 「禪密主義」の成立

第二章 鎌倉幕府と日蓮の蝦夷観

第三章 中世東国と仏教

第四章 「禪密主義」の東国蚕食

第三部 日蓮と鎌倉幕府

第一章 日蓮の体制志向とその転回

第二章 日蓮の幕政批判

結語

佐々木氏の論文は、日本中世の仏教を包括的に把握しようとするものである。氏はまず緒言において、いわゆる鎌倉新仏教・旧仏教の全体を捉えるための視角について論じ、従来の学説の中で最も有力と目される黒田俊雄氏の「顕密体制」論に批判的な検討を加えることを通して、自己の視座を明らかにする。氏の黒田説批判の第1点は、「顕密体制」の概念は朝廷（公家）との関係においては確かに有効であるが、幕府（武家）の関係する領域をもこれに包含することには無理があるということ、第2点は、鎌倉時代の様々の仏教運動を思想的に判別することに黒田説は必ずしも成功していない、ということである。これから氏は、政治権力といかなる関係にあるかという視点を重視し、特に、鎌倉幕府の支配下にある世界の独自性に注目すべきことを主張するとともに、思想的判別の規準として、「神祇信仰」を説くか否か、という観点の導入を提起する。これらは実は表裏一体の問題

であると氏はみなす。政治権力との融合を志向するものは「神祇信仰」を積極的に説くことになるとし、氏はこれを「体制仏教」と名付ける。逆に、「神祇信仰」を否定ないし無視する者は政治権力との対立を生むとして、これを「反体制仏教」と呼ぶ。さらに、「体制仏教」を「公家的体制仏教」と「武家的体制仏教」の二つに分ける一方、第三の範疇として「超体制仏教」を設け、以上の分類に基づき、中世仏教の全貌を捉えようとする。

第一部は、中世を通して、「体制仏教」と「反体制仏教」の展開と対立の様相を追う。第一章は、「神祇信仰」の問題が中世仏教の要の位置にあったことを論じる。即ち、中世の最初期に登場した浄土宗の法然教団は、旧仏教側から激しい非難を浴びて弾圧されるが、旧仏教側の攻撃の矛先はその「神祇不拜」の態度に向けられたとし、法然という「反体制仏教」の出現によって、「体制仏教」の姿と主張が明瞭化されることになったとする。さらに、「神祇信仰」を保持し「武家的体制仏教」の担い手となった臨済禅の栄西、「神祇信仰」を説くことなく「反体制仏教」の立場を貫いた親鸞と道元、「体制仏教」から「反体制仏教」に転換するという軌跡を辿った日蓮、「神祇信仰」を念仏信仰の支えとした一遍、「反体制仏教」の「体制仏教」化が進む時代に「反体制仏教」の側に立った蓮如・日親等の動向を述べる。第二章は、まず、「公家的体制仏教」と「武家的体制仏教」の相違と特徴を論じ、延暦寺（山門派）を中心とする「顕密主義」の「公家的体制仏教」に対して、「武家的体制仏教」の中心は園城寺（寺門派）と東寺（真言宗）にあり、その特徴は密教と臨済禅を重んじる「禅密主義」として捉えられるとする。次に、「反体制仏教」を解説した後、さらに、行基、空也から西行、一遍に至る系譜を「超体制仏教」と名付け、「神祇信仰」の可否に囚われることのない、自由な仏教者の生き方の世界であるとする。第三章は、鎌倉末期以後の「体制仏教」と「反体制仏教」の展開を論じる。

第二部は、「武家的体制仏教」の内実と、その舞台となる東国における仏教の状況を追究する。第一章は、寺門派・真言宗寺院と幕府との親密な関係、山門派と幕府との根深い対立、および寺門派・真言宗の強い反山門派意識を史料上に検証し、鎌倉幕府の宗教政策の独自の性格とその歴史的背景を確認する。第二章は、中世の北辺（東北地方北部・北海道）観を整理し、日蓮の蝦夷観を分析する。第三章と第四章は、鎌倉幕府の成立によって、東北地方の宗教状況が大きな変貌を遂げるに至った様相を分析する。即ち、東国では古代に天台宗の教線が拡大を遂げたが、鎌倉時代にそれらの天台宗寺院が幕府によって禅宗や真言宗に改宗させられた事例が多く見出されることを検証し、ここに幕府の「禅密主義」の政策的な現れが認められるとする。

第三部は、特に日蓮に焦点をあて、佐渡流罪の以前（佐前）と以後（佐後）に分けつつ、その思想と「武家的体制仏教」との関係性を分析する。第一章は、まず、日蓮の「国主」観を取り上げ、天皇に言及した史料をあまねく検討した結果、佐後に至って、承久の乱における後鳥羽上皇の敗因は密教の祈祷にあるという明瞭な認識に達し、幕府を実質的な国主とする捉え方が生まれたこと、その幕府も密教の祈祷を続ける限り国主の地位を失うこと

になると説いたこと、この背景には法華經信仰の徹底化があることを論じる。次に、日蓮の武士観を取り上げ、日蓮が武士的道德を重んじたことを詳述する。第二章は、まず、日蓮の神祇観を分析し、「神祇信仰」を受容していた佐前から、神祇を法華經の守護神として捉え直すようになる佐後への変化を辿り、「体制」から「反体制」への転回をみる。次に、日蓮と密教の関係を論じ、密教の容認からその批判に転換し、蒙古襲来を機にさらに密教否定を徹底化してゆく過程を検証し、幕府の「禪密主義」に対する「反体制」者として日蓮を位置づける。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 河 内 祥 輔
副 査 教 授 南 部 昇
副 査 教 授 藤 井 教 公
副 査 助 教 授 細 田 典 明

学 位 論 文 題 名

中世仏教と鎌倉幕府

佐々木馨氏の学位申請論文（論文博士）に関し、文学研究科委員会は平成10年9月18日に審査委員会を発足させた。以後、審査委員会は第1回（9月18日）、第2回（10月20日）、第3回（10月27日）と会議を重ねて論文内容の審議を進め、11月5日に口頭試問を行い、同日、第4回委員会を開き、全員一致で佐々木氏の論文は博士（文学）の学位を授与されるに値するとの結論に達し、さらに11月17日に第5回委員会を開き、審査報告書を取りまとめ、12月11日の文学研究科委員会において、その審査結果を報告した。平成11年1月22日、文学研究科委員会はこれを承認した。

佐々木氏の論文は、中世仏教のあらゆる宗派と改革運動を氏独自の座標軸によって解析し、包括的に把握することを試みたものである。氏はその座標軸として、仏教と政治権力との関係を設定したが、それは宗派や教団、あるいは仏教者個人が政治権力といかなる関係をもったか、という外面的行動の問題に止まらず、日本の思想それ自体に関わる問題であったと捉えられている。なぜならば、古代・中世の政治権力は「神祇信仰」を自身の中に骨肉化していたからである。政治権力は「神祇信仰」を基礎に組成された「神国思想」によって、自らを合理化していた。氏が、中世仏教はこの「神祇信仰」に直面することから出発するとし、政治権力との関係が思想そのものに関わらざるをえないと捉えたことは、中世仏教のおかれた一つの基本的状況を正しく見通したものであるといえよう。ここから展開される氏の中世仏教論は、きわめてスケールが大きく、かつ、分かりやすいものとなっている。従来の「新仏教」「旧仏教」の分け方が便宜的であり、「正統」「異端」の論が曖昧さを拭い切れないのに較べると、氏の「体制」「反体制」「超体制」の分類を用いた分析は、政治的動向と思想的傾向の連結を明瞭に描き出しており、説得的である。政治史研究と仏教史研究を結合するための有効な方法であると認められる。

さらに、本論文の成果として高く評価できる点は、鎌倉幕府の宗教政策に関する研究で

ある。幕府が一個の政治権力として存在するのみならず、仏教との関係において特色ある独自の世界を構築したことが解明された。山門派中心の朝廷に対して、その山門派を排除する幕府、という氏の描くイメージは鮮やかである。しかも、「禪密主義」と名付けられたこの幕府の宗教政策が、鎌倉のみではなく、東国地域に広く浸透し、東国における仏教の状況を一変させるに至ったことを明らかにした分析は、本論文に幅の広さと厚みを与え、論文全体の説得力を高めており、また、東国地域の歴史研究に新たな視点を提供するものである。

このほか、氏の独自の見解は様々の論点において示されている。本論文は優れた問題関心と史料の博搜によって貴重な成果を達成しており、学界に多大の貢献をなす労作と認められる。以上により、審査委員会は、全員一致で、本論文は博士（文学）の学位を授与されるに値すると判定し、文学研究科委員会はその審査結果を承認した。